

主体的・創造的な活動をとおして生きる力を身につける
～ふるさとに学び、ふるさとと自分を考える活動を中心として～

1 地域の取組の概要

(1) 宍道町の概要

宍道町は、島根県東部、宍道湖の南西端に位置する、面積60.17km²、人口9,558人（平成14年11月現在）の町である。農業のほか古くから、宍道湖漁労や特産の来待石加工等特徴ある生業が成り立っている。また、山陰の東西と山陽に向かう交通網が分岐する場所で、古代から交通の要衝であった。しかし、近年は伝統的産業や農業等への就労は減少傾向にあり、児童生徒の自然体験や勤労体験、戸外での遊び等も減少している。

(2) 宍道町の取組

このような状況をふまえて、宍道町では、地域の特徴を生かし、町の豊かな自然や伝統的な産業活動、昔の遊び等に触れることを通して、豊かな心やねばり強く物事に取り組む意欲的な態度を育てようと、町内全ての学校（小学校2校、中学校1校、小・中の分校1校、高校の分校1校）を推進校とし、勤労生産に関わる体験活動を中核にし、伝統的産業、昔からの農作業、文化伝承産業活動等の体験活動に取り組んでいる。

2 宍道中学校の概要

(1) 宍道中学校の概要

本校は、宍道町のほぼ中央に位置しており、町内の2小学校のほとんどの生徒が進学してくる。学級数は10学級（内特殊学級1）、生徒数281名、教職員数22名。中学校に対する地域の関心は高く、中学校教育に対して協力的である。

(2) 本校の教育目標

知・徳・体の調和のとれた全人教育をめざし
学力の向上をはかる 豊かな情操を養う たくましい力を育てる

3 活動に関する全体の計画

(1) 体験活動の主なねらい

学校生活ではできない体験をとおして、豊かな人間性を育む。

地域のヒト・モノ・コトを十分に活用した体験活動を行うことによって地域の中で生徒の生きる力を育てる。

(2) 体験活動の位置づけ

本校の研究実践における位置づけ

本校では、生徒の実態をもとに、素直で前向きなところや思いやりのあるところを大切にしつつ、自分の考えを積極的に表現する力、先を見とおして行動する力、たくましさを身につけ、基礎的基本的な学習内容のより確かな習得をめざすという課題を整理した。このことから、今年度特に重点的に取り組む必要があると考えたのは、ア 体験活動を重視する、イ 課題解決型の学習を展開する、ウ 基礎基本の指導の徹底を図るという3点である。ア、イの具体的実践の場として「豊かな体験活動」を位置づけている。

教育課程上の位置づけ

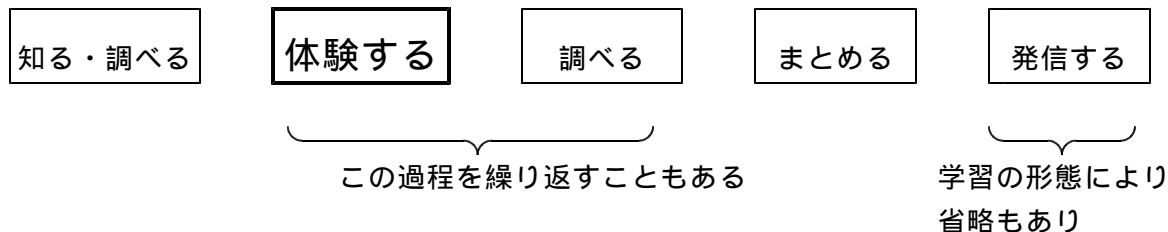
ア 教科、イ 総合的な学習の時間、ウ 学校行事 の3つに位置づけて行う。

(3) 「豊かな体験活動」を行うにあたっての基本的な考え方

新しい活動を始めるのではなく、今までの活動を継続・発展させる。

体験活動は、常に目的でありまた手段でもあるととらえる。

ただ体験して終わるのではなく、体験を価値づけ・意味づけるための事前・事後の学習を充実させる。そのため次のような流れを基本とする。



(4) 体験活動の内容

総合的な学習の時間（以下、「総合」とする。）におけるふるさと学習を中心に、各教科、行事で社会奉仕、自然、職業・就労、文化等に関わる体験活動を行う。総合においては、「1年で知り、2年で触れあい、3年で考える（発信する）」という系統性をもって、第1学年では、体験をとおして宍道湖をはじめとする町内の自然、名所旧跡、伝統的産業等を知り、各々が課題を追求する。それを受け継ぎ、第2学年では、農業・漁業（しじみ漁）体験を軸に年間を通じてさまざまな職業を体験し、それぞれの課題を追求する。さらに第3学年では、過去2年間の学習をもとに、自分たちのつかんだ課題により環境、教育、福祉の体験・調査をし、ふるさとの未来を考え、自らの生き方を考える学習を展開する。（下の表）

表

宍道中学校豊かな体験活動 主体的・創造的な活動をとおして生きる力を身につける		
<p><教科></p> <p>1年技術・家庭科 地元建築組合による「大工さんに学ぶものづくり」 ・かんな削り等の実演，制作の指導</p> <p>2年技術・家庭科 地元菅原そば会による「そばうち体験」</p> <p>3年理科 島根大学教官による「島大理科実験教室」 ・講義と実験</p>	<p><総合的な学習の時間></p> <p>1年 ふるさとについて広く知る ・宍道町クイズオリエンテーリング大会 ・ふるさとの自然を伝えよう～森林公園・宍道湖自然館ゴビウス訪問～ ・伝統工芸体験～来待石彫刻～</p> <p>2年 ふるさとで働く人々と触れあう ・比較調査（松江・東京の職場を調べる） ・職場体験 ・～農業・漁業体験～ ・職場体験（サービス業等の体験）</p> <p>3年 ふるさとについて深く知り、その未来を考える ・環境～地域の環境についての調査，体験～ ・教育～保育・児童福祉についての調査，体験～ ・福祉～高齢者・障害者福祉についての調査，体験～</p> <p>複式 ふるさとで触れあい、学ぶ ・宍道町の観光・レジャーの施設について</p>	<p><学校行事></p> <p>1年 江田島研修 ・瀬戸内海に面した国立江田島青年の家での宿泊研修 （野外炊飯，オリエンテーリング，カッター訓練，キャンプファイヤーなど）</p>

4 活動の実際（第2学年の取組より）

（1）活動の状況

月日	体験活動	目的・内容	具体的な活動場所
5 / 2	比較調査 （松江研修）	・松江ならではの職場を訪問し、職場や働く人に対する認識を深め課題意識をもつ。	県庁，検察庁、裁判所、銀行，お茶店，和菓子製造所，テレビ局，旅館，観光施設など計16カ所
5 / 18 ～19	職場体験	・ふるさとでの職場体験をとおしてふるさとで働く人と触れあい，ふるさとと職業と人に関わる課題を追求する。	畜産（22名） 1カ所 畑作（13名） 3カ所 漁業（20名） 宍道湖漁協 稲作（36名） 12カ所 計17カ所
9 / 11	比較調査 （東京研修）	・東京ならではの職場を訪問し，身近にない職業についての理解を深める。	新聞社，放送局，大使館，書店，コンピュータソフト会社，東京都庁，日本銀行，財務省，警視庁，など計18カ所
9 / 15 ～16	職場体験	・1学期に続き体験活動を行うとともに，各班の課題を追求する。	おおむね1学期に同じ。
11 / 5	学年発表会	各班のまとめを発表する。	宍道中学校
11 / 16	全体発表会		
2 / 26	職場体験	・各自が特に興味のある職場で体験活動をし，1・2学期の体験と比較するとともに，1年間を振り返り各々レポートをまとめる。	ショッピングセンター，旅館，食堂，食品製造会社，電気・水道工事会社，ガソリンスタンド、保育所，幼稚園，ケアセンター，病院など計26カ所

（2）工夫した点など

事前・事後の学習の充実を図る

ア ガイダンスの充実...外部講師による講話，前年度の取組の様子の紹介等

イ 各自が課題を設定し長期間追究する学習を展開

ウ 必要に応じ班単位で再調査・体験...体験を単発で終わらせず，対象とのつながりを保つ

エ いろいろな形態のまとめ，発信の方法...表現する力を育てる

オ 総合の発表会...体験学習 までのまとめ，今後の課題を明らかにする

地域・家庭との連携をはかる

ア J A，宍道湖漁協等による協力...体験先の斡旋，日時等の調整等

イ 町の人材バンク（生涯学習ボランティア登録），ボランティア謝金制度の活用

ウ 総合の発表会...保護者・地域への学習成果の発表と発信の場



エ 学年部だより（月1回発行）の利用...保護者へ学年の取組を知らせる

(3) 体験活動についての評価

総合の評価の一環として行うが、特に体験活動については、自己評価カード、体験先への礼状、感想文、課題についてのまとめ、研修・体験先へのアンケート、観察等により評価する。

5 学校支援委員会について

(1) 学校支援委員会の構成（14名）

勤務先又は機関・団体名	職名	勤務先又は機関・団体名	職名
J A くにびき穴道支所	営農センター所長	穴道町教育委員会	生涯学習推進室長
穴道湖漁協	理事	穴道中学校 P T A	会長
穴道商工会	事務局長	穴道中学校	校長
来待ストーン	館長	穴道中学校	教頭
菅原そば会	代表	穴道中学校	1年主任
青少年育成町民会議	会長	穴道中学校	2年主任
穴道区長会	会長	穴道中学校	3年主任

(2) 活動の状況

第1回 10月29日（火）

豊かな体験活動の趣旨説明と各学年部の取組の紹介、意見交換

第2回 11月16日（土）

総合的な学習の発表会の反省・評価と今後の連携のあり方についての協議

第3回 2月28日（金）

ブロック交流会報告、今年度の活動の反省、来年度に向けての要望等

5 これまでの成果と課題

(1) 成果

平成14年12月実施の総合のアンケートで、「総合の時間でよかったこと」として、一番多くの生徒（195名/281名中）が挙げたのは、「教室から出ているいろいろ体験ができた」ということであった。さまざまな体験をとおして、教室では味わえないような感動を得、多くの生徒が、今後の活動に対して意欲をもっている。

学校支援委員会の立ち上げ、体験先との連絡会の実施、体験活動後の継続的な交流など、体験活動を介して、地域と学校の関係が深まった。

学習を通して、ふるさとについて深く考えたり、自らの将来の生き方や将来の職業について考えたりする生徒が出てきた。

体験活動が、社会のルール、マナーなどを知るよい機会となった。

(2) 課題

体験活動を価値づけ・意味づけるよりよい事前・事後指導のあり方の追求。

体験活動と教科学習との関連性の明確化。

小学校との連携の強化。

中学校3年間の体験活動の系統化。

教員による事前研究、打ち合わせ等、諸準備にかかる時間の効率化。